

ツアーを通して学んだこと

東京都立三田高等学校 Sae S.

私はカンボジアから帰国して、幸せとは何かについて考えるようになった。現地の人々との交流やクラスの体験を通して、カンボジアの人々の生活には、日本では感じる事の出来ないゆとりや穏やかな雰囲気を感じる事ができた。

例えば、仕事に対する熱意だ。日本大使館のIさんから、同じ職場で働くカンボジア人の仕事の姿勢がどんなものかお話を伺った。日本では、「仕事がすべて」という風潮から、先日もあった台風のような非常時でさえも、出勤しようとする人が多くみられた。対して、家族や趣味、そして、友達までも大切にしているカンボジア人の事を聞き、感覚や意識の違いを感じさせられた。日本社会で深刻な問題になりつつある過労死や自殺者の増加。自分の身を削ってまで仕事に打ち込む日本人に、力を抜きつつ何でも楽しむカンボジア人の姿を見せたい、と強く思った。

また、家族や周りの人を大切にしているという気づきは、復学支援クラスに通う女の子(Tyちゃん)の家庭訪問でも感じられた。彼女は月収 50 \$ (日本円にして約 5400 円)で、貧しい暮らしを送っていた。経済的な問題から、弟や祖父母と離れ離れに暮らし、今は自分だけが学校に通えている状況だと聞いた。彼女が「今一番欲しいものは勉強する時間。医者になって村の人々を救いたいと思っているし、そこで得た収入で弟を学校へ行かせたい。」と話してくれた。15 歳という若さにして、周りの家族のことを思いやった夢を持って勉強する人がいるということに感銘を受けた。目先の大学受験合格という目標しか追っていなかった自分に恥じらひを感じた上に、自分が何のために勉強をし、学校へ通っているのだろう、と考えるきっかけにもなった。私は途上国の歴史や民族、宗教問題などを学び、彼らのバックグラウンドを理解したうえで支援をしたい。高学歴、高収入が決して豊かな人生であるとは言えないということは彼女の言葉からも感じられるだろう。彼女の持つ価値観や内面的な豊かさは、先進国でモノに恵まれた、ある意味豊かな暮らしを送る私たちには欠けている。

果たして、私たちは充分幸せな生活を送れているのだろうか。この文章を目に通しているあなたにも是非考えていただきたい。



(左)家業の手伝いをするTyちゃん



(右)Tyちゃんと私たち

そして、“学び”の大切さも同様に痛感した。今回このツアーで学びたいテーマとして、私は「教育」を選び、カンボジア人の考える教育がどんなものであるのか、また、教員数の不足や貧富の差から生まれる教育格差についても学ぼうと決めていた。だが、現地のガイドさんからカンボジアの学生はポルポト政権の話を学ばない、とツールスレンで聞いたときに、自分自身表面的な問題にしか焦点を当てていなかったことに気付いた。このことに気づけたのも実際に足を運び、生の声を聞いたからこそ分かったことである。他にも政府の教育対策に対する思いも聞かせてもらった。

教科書の内容は国家の人材育成に繋がるため、内容は配慮されている。しかし、政府はポルポト政権という、“暗黒時代”を歴史の教科書から消し去った。子どもたちにはそれを学ぶ機会が失われてしまったのだ。未来をよりよくする責任を担う子どもたちに、過去の過ちや負の部分も含めた「歴史」を伝えていくことが、国の発展にもつながり、“カンボジア”の国民として知るべきことでもあると思う。

そしてこの現状から、今のカンボジアの子どもたちには学校で学べること以外にもベクトルを向け、ポルポト政権のことがよくわかるツールスレン刑務所や、キリングフィールドなどにも行って、見て、感じてきてほしいと思った。

これからのカンボジアが真っすぐ、強く発展することを願う。



(左)塗り絵プロジェクトでお喋りをする子どもたち



(右)私たちが用意したゲームに参加する子どもたち